

社会科

新谷 和幸・中丸 敏至・迫 眞也

I. 研究の経緯

1. 基本的な考え方

東雲小・中の社会科における子どもの課題を洗い出し、教員集団の良さを生かしながら、目指す子ども像、課題解決のための手立てを設定し実行することで、東雲小・中学校7年間を通して、社会科の学びがつながる授業づくりのあり方を検討する。

2. 社会科授業を通して分かる子どもの課題

授業担当している児童（小学4・6年生、中学1・3年生）へのアンケートを通して、東雲小・中7年間の社会科における学びのつながりに関する課題把握を行った。アンケートでは、児童が感じる社会科授業の楽しさや有用性を中心に調査した。その結果、以下の課題が浮かび上がった。

表1. 社会科授業に関する意識調査とその結果

	対象	小学4年生	小学6年生	中学1年生	中学3年生
社会科授業への興味・関心	授業が楽しい理由	①社会がわかる ②調べて学べる ③先生がおもしろい ④思考する楽しさ 仲間と学びあえる	①先生がおもしろい ②自分たちで探究できる ③社会がわかる ④仲間と学びあえる	①アクティブボードの利用。 ②先生の話がおもしろい	①アクティブボードの利用。 ②先生の話がおもしろい。
	楽しくない理由	①社会科が苦手だから ②発表が苦手だから	①社会科が苦手だから ②勉強が嫌いだから	①社会科が好きでない。 ②社会に興味がない。	①社会科が好きでない。 ②社会に興味がない。
	楽しい授業とは？	①活動できる授業 ②仲間と学びあえる授業 ③社会を学べる授業 ④自分たちで探究できる授業。	①仲間と学びあえる授業 ②関心事を学べる授業 ③熟考・探究できる授業 学ぶ雰囲気のある授業 ※テスト成績につながる授業	①自分たちが参加できる授業 ②話がわかりやすい授業	①自分たちが参加できる授業 ②話が分かりやすい授業
	楽しくない授業とは？	①聞く書くだけの授業 ②社会がわからない授業 ③発表や話し合いのない授業 ④学ぶ雰囲気でない授業	①先生主導の授業 ②学ぶ雰囲気でない授業 ③書く覚えるだけの授業 ④学びあいのない授業 発展・探究のない授業	①淡々と進む授業 ②説明だけの授業 ③学ぶ雰囲気でない授業	①淡々と進む授業 ②説明だけの授業
社会科授業への価値	授業が役立つ理由	①具体的な単元を通して社会がわかるから ②体験できるから ※受験に役立つ	①将来に活用できるから ②世の中を知ることができるから	①社会に出た時に使えそう ②豆知識から授業が広がる	①社会に出た時に使えそう ③豆知識から授業が広がる
	役立つ授業とは？	①社会がわかる授業 ②生活を考える授業 ③社会人として必要な事を教えてくれる授業 ④みんなで疑問を出し合い調べ考える授業	①社会を知りわかる授業 ②将来に生かすことのできる授業	①詳しく教えてくれる授業 ②身近な例を用いる授業 ③日常生活と関わる授業	①くわしく教えてくれる授業 ②身近な例を用いる授業 ③日常生活と関わる授業
	役立つ授業とは？	①ない ②探究できない授業 ③関心のないことを無理に教える授業 ④先生の介入が多い授業	①ない。 ②既習知識を教える授業 ③単語を覚える授業 ④教科書通りの授業		
	社会科が不得意な理由	①予想が難しい ②わからなくなる ③知らないことが多い ④好きでないから	①暗記が苦手 ②テストがよくない	①暗記が苦手	①暗記が苦手

※は少数であるが気になる意見

【社会科における子どもの課題】

社会科授業に関して好意的であるものの、その授業観や社会認識に関する意識が学年が上がるにつれて変容し、社会科に対する関心だけでなく自信も低下している子どもが増えている点。

3. 東雲小・中社会科7年間で目指す子ども像と研究目的

なぜ子どもの社会科授業の関心と社会認識との関連性が特に校種間で大きく異なるのだろうか。これまで社会科部で検討した結果、やはり「小学校・中学校での授業スタイルや、時間割などの授業設定上の違いが大きい点」が挙げられる。それを以下に示す。

表2. 東雲小・中での社会科授業に関する主な違い

	東雲小学校	東雲中学校
授業スタイル	子どもの学びあいによる課題探究の授業	教師中心の説明によって知り分かる授業
通常の授業方法の具体例	児童が疑問に感じた課題を設定し、個人で資料を活用し予想を立て、話し合いを通して吟味・検討し、教師による揺さぶり発問を契機に問題を追究を深め、最後に学習内容をノートにまとめる。	教師が課題提示し、アクティブボードを使って教科書の内容を押えた後、プリントの穴埋めを教師の説明と個人の調べ学習によって追究し、最後に学習内容をプリントの下枠にまとめる。
各校種で授業を行う上での利点	学級担任制なので、学習展開に応じて、柔軟に時間割設定することができる。	各生徒が授業において、発言や聞き取りを柔軟に行うことができる。
各校種で授業を行う上での欠点	年齢が下がれば下がるほど、ノートを取りながら、友だちの発言をきいたり発表したりすることが難しく、時間がかかる。 6年生のほとんどが受験をするので、社会科で社会を学ぶ意識を維持するがむずかしい。	専科制なので、時間割や 時間数、学習内容の関係上、授業時間や授業展開の融通が難しい。 義務教育を卒業させ、進学させるための教科指導など受験を意識した対応。

本校社会科部では、子どもの社会認識に関して「単語としての知識暗記量の獲得でなく、子どもが社会を知り分かる点」に力を注いで日々授業研鑽している。しかし、残念ながら受験を意識する発達段階になればなるほど、子どもの受験への意識も高まり、成績やテストの得点を気にかけたり、社会科を知識の暗記としてとらえたりする割合が増えている。これは社会科が苦手な子どもだけでなく、得意な子どもに関しても同様である。もちろん、授業では受験のためだけの社会科授業を行ってはいない。社会を知り分かることを通して学んだ社会の見方や考え方が、受験にも生かされると考える。

学びの主体は子どもである。それ故、知らず知らずの内に、子どもの立場や思いを踏まえ、受験への意識から、社会を知りわかる授業が形骸化しているのかもしれない。

そこで、社会科授業を暗記教科としてでなく、社会を知り分かるための学習として子どもがとらえ続けられるよう、目指す子ども像と研究目的以下のようを設定した。

【社会科7年間の学びのつながりで育む子ども像】

「社会を学ぶ知的好奇心」、「クラスという社会で学びを追究する意欲・態度」を持ち続け、高め合える子ども」

－『社会の一員としての役割を自覚し、自信をもって社会で行動できる社会人』の育成を目指す－

【研究目的】

7年間の東雲社会科を通して、子どもが「社会を学ぶ知的好奇心」、「クラスという社会で学び追究する意欲・態度」を持ち続け高め合うことのできる授業づくりを行うことで、子どもの社会認識や社会に関する諸力はもちろん、社会科に対する関心や自信も高められるようにする。

4. 社会科授業構成・授業実践における共通内容・方法

「子ども」が社会を知り分かるための学習を構成するには、その授業構成論はもちろん大事であるが、「子ども」が主体的に学習に臨む意欲や関心を高めることが必要である。その出発点が「社会を学ぶ知的好奇心」ととらえる。「知的」とした理由は、単に見学や活動が楽しい、提示装置がおもしろいとい

う好奇心と区別するためである。

また、「子ども」が学びの主体となるには、子ども自身がクラスという小さな社会を意識することが大事である。社会科は社会を学ぶ授業であり、子どもは未来社会の形成者である。子どもがこのことを意識することはもちろん、社会における自分なりの役割を自覚し、責任をもって行動できる「社会の一員＝社会人」としての資質を育むには、まず小さなクラス社会の、授業という場で、課題に対する意見を持ち、クラス社会を形成し合う仲間と共に話し合い、吟味・検討していく学習方法が必要である。

「子どもが学びの主体」であり、「子どもの興味・関心・意欲・態度は、社会科授業で育む知識や諸力とつながり、それらを育む原動力」である。このことを児童も、我々教師も今一度見つめ直していきたい。子ども像の育成を目指し、社会科部が社会科授業における共通確認した内容・方法を以下に示す。

【東雲社会科の共通確認事項（子ども像を育む上で学びのつながる授業を行うための手立て）】

内容：①子どもが社会を知り分かる授業づくり（「社会認識」を育む授業の追究）

方法：②子どもが学びあい、探究できる授業づくり

（「教師が教える授業」から「子どもが学ぶ授業」への転換）

表3. 東雲社会科の授業づくりにおける共通のポイント

手立ての内容方法 段階	内容：①子どもが社会を知り分かる 授業にするには	方法：②子どもが学び合い探究できる 授業にするには
《授業構成段階》	○子どもの知的好奇心をくすぐる課題 が生まれる学習材の設定	○子どもが学び合いを通して、課題追 究できるような単元構成
《授業実践段階》	○子どもの探究が可能となるような教師の揺さぶり発問・資料の準備・板書構成 ○社会を知り分かり学び合えるための、課題設定後の予想と授業・単元終末での 振り返りの場を設定	

5. 子どもの知的好奇心、学習意欲・態度を育む場面の焦点化と段階の設定

社会科授業では、児童の知的好奇心や学習意欲・態度を育む場が多様にある。そこで、知的好奇心に関しては、「単元を貫く課題の設定場面」を、クラス集団での学びあいにおける学習意欲・態度に関しては、「予想を練り合う場面」に焦点を当て、内容の質的な側面を考慮して表4に5段階で示した。いずれも「Stage 3」を社会を知り分かる授業、子どもが学びあい探究する授業を形成する上で、ポイントとなる段階とした。子どもの課題を考慮すると、校種が移行する小6～中1の間が大きく変容する段階である。このつながりをスムーズに行うことが「学びのつながり」のカギと考える。子どもの発達段階やクラス構成を考え、小5～中1を1つのまとまりとしてとらえた。また、その前後も学びをつなげ深めていく上で重要ととらえ、社会科では学校提案通りⅠ期、Ⅱ期、Ⅲ期の発達段階を設定した。

表4の左右には、各発達段階で育むことをねらう課題設定場面における知的好奇心や予想を練り合う場面での学び合いにおける意欲・態度の目安を波線で記した。

表4. 子どもの知的好奇心、学習意欲・態度を育むための段階表

Ⅰ Ⅱ Ⅲ 期 期 期	社会を学ぶ知的 好奇心 (課題設定場面)	stage	クラスという社会で学び追究する意欲・ 態度 (予想を練り合う場面)	Ⅰ Ⅱ Ⅲ 期 期 期
⋮	○学習材を学ぶ上での知的好奇心。	1	○課題に対し、自分の考えを表現して いく意欲や態度。	⋮
⋮	○社会の変化をとらえる上での知的好奇心。	2	○課題に対し、他者の考えを踏まえ自 己表現していく意欲や態度。	⋮
⋮	◎社会の仕組みを学ぶ上での知的好奇心。	3	◎課題に対し、仲間と話し合い、意見 集約に参加する意欲や態度。	⋮
⋮	○国内の社会問題の解決に向けての知的好 奇心。	4	○課題に対する仲間の考えを引き出し 生していく意欲・態度。	⋮
⋮	○地球規模の問題の解決にむけての知的好 奇心。	5	○新たな課題を発見・問題提起してい く意欲や態度。	⋮

Ⅱ. 本年度の研究

1. 本年度の研究目的

本年度は、これまでの研究成果を踏まえ、「東雲小・中社会科授業の学びのつながり」の最終年として、まず方法に関しては、表3の東雲社会科の授業づくりにおける共通のポイントをより具体化することで、**社会科授業構成・授業実践における共通の手立てを明確にする。**

また、内容面に関しては、1年目は「学習材」（広島学習材：マツダ、牡蠣、浄土真宗安芸門徒）、2年目は「習得概念」（抽象概念：正義、生命、平和）に着目して授業開発・実践を行った。今回は、「グローバル化」という社会変化に着目し、表4の段階表に応じたグローバル化する社会の様子を知りわかる授業を開発・実践していく。また、東雲小・中児童の社会科授業づくりの手立てばかりに目をむけるのではなく、本校社会科部員の個性（授業観や学習理論など）を生かした授業内容・方法にもしていきたい。

教師の個性や授業観を生かしながら、子どもの知的好奇心をくすぐる学習材や学習課題を設定し、子どもの学び合いや探究を通して「グローバル化」する社会の様子が知り分かる授業開発・実践

2. 社会科授業構成・授業実践における共通確認

（1）学習材の選択

学習材の選択では、まず授業基盤として児童の実態把握が必要である。児童一人一人との関わりを大切に、児童の特性や興味・関心をとらえ、実態に即した学習材を絞る。次に、徹底した教材研究を行う。学習材に関する文献や先行研究、取材等から幅広く情報を収集し、上記に最も適した学習材を選定する。教材研究を通して児童の既成知識を上回る情報を把握し自分なりにまとめておけば、児童の心理を意識し展開する上で効果的である。

他方、社会変化や社会状況に関する話題性のある情報は、新聞など様々な媒体によって繰り返し伝えられ、児童共通の情報となり得る。このような情報に関連する学習材であれば、児童自らの生活経験を生かし、児童の日常社会と学習内容との関連性を見出しやすいため、児童の社会への意欲や関心を高め、社会を学習する知的好奇心をかきたてることができる。今回は「グローバル化」という社会変化に着目する。

（2）学習課題の設定

課題設定では、児童が意欲的に学びを追究し活発に意見交流できるようにする必要がある。内容的には、児童の驚きや切実感を伴う課題にする。それらを実感するには、課題設定前に児童の既成概念を揺さぶる事実を提示する必要がある。また構造的には、複数の視点から多面的に迫ることで解決できる課題とする。児童自身がそれらの視点に気づき、課題に繋がる内容や新たな疑問に気付くよう、実態を考慮し社会の仕組みを導く内容（知識）や問いを構造化する必要がある。知識や問いの構造化は、単元を通して獲得すべき知識を吟味・精選する。その繋がりを明確にすれば単元を構成する手だてとなる。

（3）授業構成

授業構成では、単元に活動を組み込むことで学習材に対する児童の興味・関心を高め、活発な意見交流を促すことができるようにする。しかし、大事なのは活動することではない。活動を通して社会を実感し、社会の仕組みや変化等、社会をとらえる見方に繋げることである。社会を実感する経験は、社会を自らのものとしてとらえる意識や社会に対して考える意欲を育む。特に、実物・本物に出会う活動は、児童の学習内容の実感や納得感を高め、学習と日常社会のつながりをとらえる上で重要である。

（４）授業実践

授業実践では、構造化した知識のどこを引き出す時間なのか、繋がりのある知識や問いを含めて把握する。また、学びの主体として児童が活躍できるよう、素朴な考えやつぶやきを表出しながら児童同士が学びあうための手立てを行ったり、児童の学習に対する知的好奇心に応じて、弾力的な授業展開を行ったりする必要がある。

（５）授業者の個性（授業観や授業理論など）

学びの主体は子どもであるが、子どもの学びを生かし引き出すためには、それを支援する教師の存在は不可欠である。教師は各々の個性があり、社会科授業の性向も違う。それは教師の授業の魅力にもつながる大切な要素である。故に、具体的な学習材や学習内容、教育内容の共有化は行わない。また、教師の授業観が最も現れるのは、学習内容や方法に関する理論である。ここも自立した社会科教師として、各自の個性や授業観にふさわしいものを活用できるようにしたい。

３ 社会科７年間の学びのつながりで育む子ども像にむけた授業仮説

今年度の研究仮説と各段階の仮説を以下のように設定する。

【研究仮説】

「グローバル化」という社会変化に着目しながら、東雲の社会科授業づくりの手立てを踏まえ、各段階で授業構成し実践することができたならば、子どもは「社会を学ぶ知的好奇心」、「クラスという社会で学び追究する意欲・態度」を持ち続け高め合うことで、東雲社会科における子どもの課題を克服できるであろう。

I 期：①東雲社会科の授業づくりにおける共通の手立てを踏まえながら、

②課題設定場面で学習材を通して、グローバル化する社会の変化を踏まえた課題を設定し、

③予想を練り合う場面で各自が意見をもち、他者との関わりを通して考えを吟味し、クラスとしての意見を集約できるようにしていけば、

子どもの社会科を通して社会を学ぶ知的好奇心やクラスという社会で学び追究する意欲・態度を高め、社会科を学ぶ意識や自信を育むことにつながるだろう。



II 期：①東雲社会科の授業づくりにおける共通の手立てを踏まえながら、

②課題設定場面で学習材を通して、グローバル化する社会の変化や仕組みだけでなく、グローバル化による社会問題につながるような課題を設定し、

③予想を練り合う場面で各自が意見をもち、他者との関わりを通して自他の考えを高め吟味し合いながら意見集約でいるようにしていけば、

子どもの社会科を通して社会を学ぶ知的好奇心やクラスという社会で学び追究する意欲・態度を高め、社会科を学ぶ意識や自信を育むことにつながるだろう。



III 期：①東雲社会科の授業づくりにおける共通の手立てを踏まえながら、

②課題設定場面で学習材を通して、グローバル化する社会の変化や仕組みだけでなく、グローバル化による社会問題・世界の社会問題につながるような課題を設定し、

③予想を練り合う場面で各自が意見をもち、他者との関わりを通して自他の考えを高め吟味し合いながら意見集約し、自分たちで新たな課題や問題を提起できるようにしていけば

子どもの社会科を通して社会を学ぶ知的好奇心やクラスという社会で学び追究する意欲・態度を高め、社会科を学ぶ意識や自信を育むことにつながるだろう。

木村博一,「初等教育学の構想」『初等社会科教育学』協同出版, 2002.

木村博一,「新しい学びにもとづく社会科授業開発の基礎基本」『社会認識教育の構改革-ニュー・パースペクティブにもとづく授業開発-』社会認識教育学会, 2006.

岩田一彦,『社会科授業研究の理論』明治図書, 1994.

波多野誼余夫・稲垣佳世子,『知的好奇心』中公新書, 1973.

市川伸一,『学ぶ意欲の心理学』PHP新書, 2001.